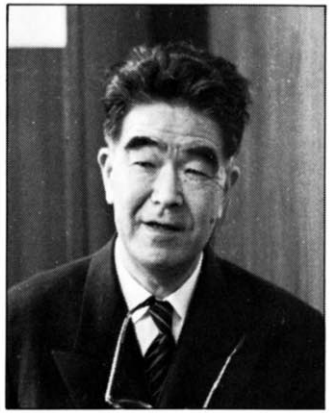
矢代幸雄先生を悼む

大和文華館館長
石澤正男



去る5月26日、月曜日の朝刊紙は矢代幸雄先生が25日午前2時30分、平塚市の杏雲堂病院で逝去されたことを一斉に報道しました。先生は1890年11月5日のお誕生ですから亨年84才6カ月余ということになります。先生の訃報は国内の全国紙はいうまでもなく、欧米の有力紙にも伝えられたため、国の内外から令夫人文様と令息秋雄様（東京芸術大学音楽学部作曲科教授）に宛てられて夥しい弔電、弔文が寄せられてきました。最晩年は静かな隠退生活を送っておられたとはいえ、さすがに先生は国際的に令名の高かった学者だけに、先生のご逝去は世界的な大損失として報道され哀惜の言葉が述べられていました。25日の夜は極く内輪の人々だけでお通夜をし、翌26日午後1時から近親者だけでの密葬が行われ、みんなの嗚咽のなかで各自が先生との最后のお別れをいたしました。

本葬は5月31日、矢代家の菩提寺で横浜市神奈川区飯田町24番地にある浄土宗成仏寺において行われました。祭壇には新に下賜された銀盃一組と日本の勲章と並んでイタリア政府から贈られた最高文化功労金章その他がずらりと飾られていました。それはいかにも先生が学者としては国際的水準線上に一際ぬきんでておられたことをよく象徴しているように感じられました。餘り広くもない本堂は美しい生花の花束に埋めつくされて、先生もさぞや御本望であろうとは思いながら、しかしふなれな葬儀委員である私たちは花束の配列に一番悩まされました。式はなるべく簡素にという矢代家の御希望により弔辞を捧げたのは文化庁長官安達健二氏、日本芸術院長高橋誠一郎氏、先生が生みの親であった美術研究所の後身である東京国立文化財研究所長関野克氏（海外出張中のため代って同研究所美術部長岡畏三郎氏）、最后に大和文華館職員を代表した私の四人だけでした。参列された方々はどなたも先生をこよなく尊敬し、多かれ少なかれ先生の学恩を受けた人々が大部分を占めていました。それだけに簡素ながらも深い哀惜の情が自ら溢れてくる立派な御葬儀でした。

大和文華館にとって元近鉄社長種田(おいた)虎雄氏を生みの親の代表者に譬えれば、初代館長の矢代幸雄先生は正に大和文華館の育ての親の代表者と申しあげてよいと思います。先生については数限りない思出が今もなお走馬燈のように私の脳裡を馳けめぐっていて、まだそ

1962.1.18 右.三笠宮殿下

1962.2.18 高松宮妃殿下を御案内して京都嵯峨の清涼寺へ

1961.11.22 右よりバーナード・リーチ氏、一人おいて故富本憲吉氏

1962.1.13 E.ライシャワー駐日米大使御夫妻をお迎えする

1960.10.31 開館式 高松宮同妃両殿下を中心に右は佐伯理事長

季刊 美のたより No.33
昭和50年9月1日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.